

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東 守

挿絵と文 池内文藏



第4話

―そなたは、悔いなく生きよ、こたろ…―

明け方の夢は、信濃の山中で無念の裡に息絶えた父の声で閉じた。暁闇の星の下では、石川源三郎の指揮のもと、朝の庭掃除が始まっている。今日から三日ばかりの宿下がりの前に、若者たちの顔色が明らかに華やいている。観心寺に於ける瀧覚の役割は、寮長兼学問所の総長として朝礼・夕礼で訓示する以外は、かれらと共に寝起きし、共に聴講することだった。物心ついた頃から隠棲を余儀無くされたかれの青春期は、近くの禅寺への日参と読経に費やされ、旅の田楽一座や琵琶法師の謳う平曲が情報源と娯楽であった。宿下がりの日、瀧覚は決まっていた。それらを実地調査(フィールドワーク)に連れ出した。自由参加としたが大半のものが付いて来た。

瀧覚の馬の轡を源三郎が取り、あとの者は徒歩。末尾に「師の御坊の名乗りは」と問うた多聞丸がいる。着任以来、瀧覚は南河内を中心に近隣の地を踏査した。長い隠棲を経て齢四十に差し掛かるかれは、心の底で旅の空を乞うた。そうやって脚で得た情報を基に、瀧覚の課外授業は進められた。聖徳太子の廟が建つ河内飛鳥の磯長山・叡福寺の山門で巻物に記した王家の

系図をもとに太子が制定した「十七条の憲法」について語りながら、はるか後世に北条泰時が定めた「御成敗式目」に話しが逸れた。この日本最古の武家法典は、太子への崇敬から十七の倍数である五十一箇条で構成されており、権謀術数を駆使して政敵を次々に肅清した父・義時に相反し、泰時が名執権と謳われた事はかれらも親たちから聴いているようだった。話を元に戻す為に太子の後見として強権を振るった蘇我氏について解説しているうちに刻限が来た。瀧覚の講義を聴く若者たちの背後に、馬を曳いたそれぞれの家の小者たちが待機している。若者たちは在地豪族の子弟であり、帰宅すれば「若君」である。

若者たちは瀧覚に挨拶をし、次々と馬上の人となる。それらに声を掛け見送る源三郎に瀧覚は「今日はそなたもゆるりとせよ」と告げる。畏怖の顔で瀧覚とその背後に立つ多聞丸をみる源三郎に瀧覚はやさしく頷く。余談ながら彼の遠祖は蘇我氏の一族で、大化の改新に於ける「乙巳の変」で中臣鎌足に味方して蘇我入鹿を斬った蘇我倉山田石川麻呂とされ、蘇我氏没落後その末裔が奥河内から富田林を経て大和川に注ぐ石川周辺に棲み、平安時代中期、この地を領した清和源氏の系譜「河内源氏」と結び付き、やがてその嫡流から日本最初の武家政権を樹立した源頼朝を輩出。河内に残った傍流は御家人となり「石川」を名乗る。石川氏は、同じく在地豪族の水走氏・恩智氏などとともに観心寺荘の地頭職として赴任した楠木氏の与力となった者たちのほか、三河に移った一族から後に若き日の徳川家康を支えた石川数正が出る。

初夏の陽が、山門の石段に瀧覚と多聞丸の影を映し出す。ふいに「師の御坊：」と多聞丸が伺いを立て、厩戸皇子（聖徳太子）の初陣の齢を訊ねた。「数え年十三」と返答すると、かれは「間もなくじゃ」と白い歯を見せた。

多聞丸の馬を曳いて来たのは雉丸だった。遅刻を全身で詫びる雉丸を制し鞍上に飛び乗る多聞丸。直後、その手が伸びて雉丸の腕を掴み馬上に引き上げた。慌てて降りようとする雉丸に「掴まっておれ」と命ずる多聞丸を眺めながら瀧覚の脳裏に父の最後の言葉が浮かんだ。

「多聞丸どの：拙僧の名は」と言いかけて大きく息を吸った。馬を進ませながら丹田に力を込める。背中に注がれる熱いふたつの視線を感じながら瀧覚は名乗りを上げた。

―我こそは、平朝臣・和田小太郎朝正なり―